

## 〔巻頭言〕

## 岐阜県立看護大学における教育・研究・地域貢献のオリジナリティ

岐阜県立看護大学 学長 黒江ゆり子

岐阜県立看護大学は、平成12年度に岐阜県の看護の質の向上に高等教育機関として寄与することを使命として開学し、その後、平成16年度に大学院看護学研究科の開設、平成18年度に修士課程（現、博士前期課程）に加えて博士後期課程を開設、平成20年度に専門看護師（CNS）コースを博士前期課程に併設し、看護学部看護学科及び大学院看護学研究科博士前期課程・博士後期課程を体系的に備えた機関となり、開学20年目を迎えるに至った。

平成22年度には公立大学法人に移行し、公立大学法人岐阜県立看護大学として一層発展的に教育・活動及び地域貢献活動等続け、看護学部看護学科の卒業生数は、1300人以上、大学院看護学研究科の修了者数は150人以上に達している。開学からの20年間にわたる諸活動の堅実な積み重ねにより、本学の教育研究活動及び地域貢献活動等は、「岐阜モデル」ともいべきオリジナリティの高い活動となり、さらにその質の重厚性が深まっている。

看護学部看護学科では、人々のもつ困難や様々な問題の解決に深い責任を感じ、創造的に問題解決のできる人材育成をめざし、一人の人間としての成熟と専門職者としての成長を拓くため、教養教育と専門教育〔看護学〕の双方を4年間かけて学ぶカリキュラムとしている。教養教育は、1-2年次の教養基礎科目では、21世紀社会を生きる市民として生活を送る基盤となる知識と技術（リテラシー）を修得し、3-4年次の教養選択科目では、幅広い視野と複眼的な思考力・判断力を培うとともに人間形成の根幹となる主体的な自己を確立し、これらにより生涯にわたり自己の生き方を追究することが培われる。専門教育〔看護学〕は、看護実践を基盤に、1年次の概論及び2年次の方法論において看護学の基本的知識と技術を学び、3年次の臨地実習では自ら看護実践を体験し、生きた知識・技術と感性を高め、4年次の卒業研究と統合演習では課題を見極め、学問的探究の意義と方法を学び、かつ4年間で修得すべ

きを自ら省察し、自主的自律的な学びを体得する。

また、大学院看護学研究科においては、保健医療福祉の利用者を中核に据える「看護実践研究」を基軸に、博士前期課程では、自施設の看護実践の改善・改革に向けた研究を通して、実践的指導者となる能力を修得し、博士後期課程では、看護実践の改革を組織的に推進できる実践研究指導者となる能力を修得するカリキュラムとしている。そして、このような特徴ある教育・研究活動を可能にするため、FD（Faculty Development）活動及び国際交流事業を発展的に推進している。FD活動では、教員への希望調査をふまえて研修を企画することに伴う極めて高い積極的参加により開催しており、国際交流事業では、WBL&WBR（Work Based Learning & Work Based Research）に先進的に取り組んでいる英国の大学と10年以上にわたる国際交流を重ねている。

さらに、地域貢献活動においては、岐阜県看護職と共同で取り組む共同研究事業、看護職の生涯学習の促進を目指した看護実践研究指導事業、及び卒業生支援（新卒者交流会、卒後2年目交流会等）等、多彩な活動を推進し、共同研究事業は累積総数439課題、看護実践研究指導事業は累積総数89事業に達している。保健師の現任教育及び退院支援における生涯学習支援については、15年以上の長期にわたる研修会等を発展的に継続している。

本学のこれらの諸活動をまとめたのが本特別号であり、同時にそれは、本学における教育・研究・地域貢献のオリジナリティが著わされたものとなっている。開学からの20年間を取りまとめ振り返ることで、今後の30周年及び40周年に向けた諸活動のあり方を見極めたいと考えている。また、これらの発展的継続により、質の重厚性を一層深め、「未来を創る人材」を堅実に育成できる高等教育機関として今後も努力を続けたいと思う。